

## 旧約ヘブライ語の対人精神活動動詞の意味

松田, 伊作

<https://doi.org/10.15017/2332754>

---

出版情報 : 文學研究. 70, pp.63-80, 1973-03-25. 九州大学文学部  
バージョン :  
権利関係 :

# 旧約ヘブライ語の対人精神活動動詞の意味

松 田 伊 作

1. 目的と方法 旧約聖書のヘブライ語の動詞のうち、'hb, sn', ršh, ḥpš, rḥm, ḥnn, ḥml<sup>1)</sup> という七つの動詞の意義を記述しようとするのがこの小論の目的である。これらの動詞は“愛する”，“憎む”，“気に入る”，“憐れむ”などと訳され、見る・聞く・話す・食べる・書く・歩く・殺すなどのような、客観的に認知できる行動の部分をも含んだ動作と対立した、外部からは直接観察できない人間の動作を表わす動詞だと考えられ、その意味で‘精神活動動詞’と呼ぶのである。‘精神活動’の意味分野 (semantic field) をさらに客体の語義的特徴に従って分類するとき、ここで扱う動詞は主として人間（および神）を客体とするという点で‘対人精神活動’という意味分野に入り、思う・考える・忘れる・欲しがるとなどの動詞と区別される。しかし我々は上に掲げた七つの動詞が、ヘブライ語の全動詞の中で、これらだけで一つの閉じた意味分野を形成していると考えたのではない。'hb の意味を手探りで調べていたら、他の六つの動詞がいつもづる式に出て来た、というのが実状である。とくに sn' “憎む”の‘類義語’は紙面の都合上割愛せざるを得なかったので、改めて論ずるつもりである。

先の拙論<sup>2)</sup>でも述べたように、文字言語の記述の意味研究上頼り得るほとんど唯一の手掛りは文脈である。この小論でも、まず問題の動詞と主語・目的語の資格において統合する名詞句をそれぞれその語義的特徴に従って整理し、その分布を明らかにしたのち、語義的に同じ統合関係を有する動詞相互間の意義関係を調べる。その際、ヘブライ語の特に詩文において、‘類義語’や‘反義語’が対句として現れる現象 (parallelismus

1) ヘブライ語の形式は原則として子音文字だけを一文字対一文字の方式で転書 (transliterate) する。

2) 松田伊作 “古代文献語の意味考察——ヘブライ語一動詞群について” 「現代言語学」(服部四郎先生定年退官記念論文集編集委員会編, 東京, 1972) pp. 299—311

membra)に注意する必要がある。すなわち、二つの語 X、Y が常に同一の統合関係においてのみ現れるとき、つまり X、Y が例えば対句として完全に対立した分布を示すときには、X、Y の意義の相異は文脈の調査だけでは分らない。しかしここで取上げる動詞については、そのようなことはなく、それぞれに特有の文脈も見出すことができるので、「語義的呼応の作業原則」<sup>3)</sup>に従って、各語特有の意義素<sup>3)</sup>を仮定し得るのである。こうして対句の文から「語義的同位置の作業原則」<sup>3)</sup>の適用によって当該動詞の類義性を確かめることはできるが、各動詞の意義の相異を知るためには、対句として現れる箇所を一応排除しなければならない。

以上は一つの文の中でのいわば狭義の文脈を利用する方法であるが、我々はより広義の文脈——これを意味の「場面」(situation)と呼ぶ——をも利用する。すなわち問題の動詞を含んだ文を中心とする言語作品が展開して見せる状況を観察することにより、その動詞の意味がいかなる具体的出来事——もちろん、これも対象言語によって表現されているわけであるから、純客観的場面などではなく、表現者の主観が抽象した場面であるが、そうであるからこそ表現者にとって関与的(relevant)な意味だけがそこに表わされている、と考え得る——に対応しているかを、見ることができるのではないか。言い換れば、言語作品の描き出す意味の場面は構造をなして、意味の「こま」は互いに関連しつゝつながっている。故にもしその「こま」が未知であるならば、その前後の意味の「こま」によって、それをある程度明らかになし得るのではあるまいか。このような予想をわれわれは立てるのである。かかる作業原則においては、一応問題の単語だけを未知項とし、これと連鎖する他の形式はすべて既知項と見なす——実はほとんどすべてが未知である筈なのに——ことを前提としている。ここに問題があるといえはいえる。しかし実地においては、旧約ヘブライ語の場合、古代以来の訳業を始め、おびただしい学問的成果が利用され得るし、問題の語の意義についても、その近似値はかなり細かい所まで分っていると見える。ただ多くの場合、研究者が自国語に翻訳することで満足していて、われわれが取ろうとしているような方法の自覚の下に意味の記述を試みるということがほとんどなかっただけである。今では自明とされて

3) これらの術語については服部四郎「意味」(『岩波講座 哲学 11 言語』, 東京, 1968) 参照。

いるが、一つの意味分野において各単語が占めている意味領域は言語ごと  
に異なるものである。したがって一つの語に対する訳語は文脈に応じて異  
なったものとなることが多い。しかしわれわれが意義素というとき、それ  
はすべての文脈に妥当するものでなければならない。それ故意義素の記述  
は一語だけの引当てではなく、文による説明の形をとるのが普通である。  
そこでわれわれは次のような仮説を立てる。すなわち精神活動はそれ自体  
としては外部から直接うかがうことのできない動作であるけれども、それ  
が人なり物なりの具体的な客体をとる限り、何らかの具象的行為をその前  
提または目的乃至結果として持ち、これをわれわれは上述の‘意味の場  
面’の考察から取出すことができる筈である；こうして、問題の動詞の意  
義素は具体的動作を表わす語の組合せとしてパラフレーズできるのではな  
いか、という予測である。

ここで念のため断わっておかねばならないが、具体的記述といっても、  
例えば 'hb を「愛する」に置換えて、人間すべてに共通の心理現象であ  
るとされる「愛する」ということがどのようなものであるかということ、ヘ  
ブライ語の世界とは独立に研究しようというのではない。それは哲学・心  
理学の領域に属する作業であって、旧約ヘブライ語 'hb の意義素の記述  
ではない。丁度 H<sub>2</sub>O の化学的記述が日本語ミズの意義素ではないよう  
に。われわれの根拠はあくまでも、対象言語が明示的 (explicit) に表現  
している意味場面なのである。

2. 分布 各動詞が現れる文において、その動詞の主語および目的語と  
なっている名詞句をその語義的特徴に従ってまとめ、各動詞がそれぞれの  
語義的環境に何回現れるかを示す。下の表において語義的環境は互いに対  
立し、抽象名詞を主語とする数例を除くと、これ以外にはない。

主語	目的語	'hb	sn'	hps	rsh	hnn	rhm	hml
男	女	22	13	3	0	0	0	1
女	男	9	2	0	0	0	0	0
親	子	7	1	0	1	0	2	1
人	人	30	62	3	7	14	6	13
人	神	14	5	0	0	0	0	0
神	人	21	7	10	13	41	34	14
人	物	61	28	28	5	0	0	8
神	物	8	7	28	15	1	0	3

なお、ここで主語・目的語というのは必ずしも明示されているものとは限らず、基底をなす意味構造におけるそれである。また「物」とは女・男・子・人・神以外のすべてを指す。

### 3. 'hb 3. 1. 意味場面

(1) dbq《固着する》：“シケムはディナを見、彼女を取り、一緒に寝てこれを辱かしめた。彼の魂はヤコブの娘ディナに結びつき、この少女を 'hb し、少女の心に語りかけた”（創34：2，3）。<sup>4)</sup> “王ソロモンは多くの外国女を 'hb し… 'hb しつつ<sup>5)</sup>、これに固着した”（王上11：1—2）。また律法として、“君たちの神ヤハウェを 'hb し、そのすべての道に歩み、彼に固着する…”（申11：22；さらに30：20参照）ことが命ぜられる。dbqの意味については“それ故男はその父とその母を捨てて、その妻に結びつき、一つの肉となる”（創2：24）が最善の注解であろう。

(2) ḥšq《結びつく》：“ハモルが言った「私の子シケムはその魂が君たちの娘に結びついていきます…」”（創34：8，上掲2，3節の箇所に対する後代の加筆？）。“ただ君の先祖だけにヤハウェは結びつき彼らを 'hb した”（申10：15）。'hb を伴わない次の例によってこの ḥšq の意義ははっきり出てくる：“捕虜の中に美しい女を見て、君がその女に ḥšq し、妻にしようとするならば…”（申21：11）。“…ヤハウェは君たちに ḥšq し、君たちを選んだ…”（申7：7）。この後の箇所の ḥšq を関根教授は適切にも“愛着する”と訳された。なお、ḥšq は神を主体とし得るに対し、dbq にはそのような例が見出されない。

(3) qšr (ni.)《結ばれる》：“ダビデがサウルに語り終えたとき、ヨナタンの魂はダビデの魂と結ばれ、ヨナタンは彼を自分自身のように 'hb した”（サム上18：1）。qšr は上の二語と異なり、《（ひもなどで）結び合せる》という、より具体的な行為を表わす（創38：28 申6：8 ヨシ2：18等参照）。

4) 旧約聖書の章節は Kittel 編 Biblia Hebraica, 第7 (=3) 版, Stuttgart 1952 による。日本聖書協会訳のそれとは異なることがある。

5) l' hbb を M.Noth (Könige, Biblischer Kommentar IX, 1. Neukirchen 1968, p. 241) と共に dbq に対する modaler inf. cstr. (“iudem er liebte”) とする。

(4) 《追求する》：“賄賂を ’hb し、贈物を追求め (rdp)” (イザ1 : 23)。“私は外国の男達を ’hb し、彼らのあとを追いかける (’ħrj …’lk)” (エレ2 : 25)。“君たちは何時まで…空しいことを ’hb し、偽りを求めているか (tbqšw)” (詩4 : 3)。“私を ’hb する者を私は愛する、私を探し求める者 (mšħrj) は私を見出す” (箴8 : 17)。

(5) 《結婚する》：男女間で ’hb ということがいわれるほとんどすべての箇所、それは性的関係を予想させる。すなわち 創24 : 67 (イサクとリベカ), 29 : 18 (ヤコブとラケル), サム上18 : 20 (ミカルとダビデ), 王上11 : 1—3 (ソロモンと外国女達), エス2 : 17 (アハシュエロスとエステル), サム下13 (アムノンとタマル) では ’hb が夫婦関係乃至性的結合に発展することが明示的に記され、申21 : 15 (一般的規定), 士14 : 16 (サムソンと妻), 16 : 15 (サムソンとデリラ), サム上1 : 5 (エルカナとハンナ), 伝9 : 9 (一般的), 代下11 : 21 (レハベアムとマアカ) は夫婦間のことであり、士16 : 4の“サムソンがデリラという女を ’hb した”という簡単な叙述が直ちに結婚を暗示することは、その後の場面から明らかである。このように見てくると、ホセ3 : 1の有名な“再び行って姦淫を行なう女を ’hb せよ”という言葉も、最近の Rudolf らの反論<sup>6)</sup>にも拘らず、やはり姦婦との結婚を指示したものと解すべきであろう。勿論ホセア等の預言者においては、このような key-word には独自の思想が鋭く盛られているから、一概に言うべきではないであろうが、ここで我々が問題にしているのは、この ’hb という語に接したとき当時のヘブライ語話者たちが第一義的に何を表象したか、ということである。

(6) bħr 《選ぶ》：神がイスラエルの民を ’hb することが bħr によって展開されていることは神学の問題としてすでに屢々説かれてきた<sup>7)</sup>ので、ここでは ’hb と bħr とが例えば“ヤハウェは君達の先祖を ’hb し、その後の子孫を bħr したので君を…エジプトから引き出した”(申4 : 37)のように、明示的に関連させられている箇所(その他、申10 : 15 詩47 : 5 78 : 68)と、“(ヤハウェは)君を ’hb し、祝福し、ふやすであらう…君はすべての国民にまさって祝福されよう…”(申7 : 13, 14), “…私(ヤハウェ)は君を ’hb。私は諸国民を君の下に、諸国民を君だけのた

6) W. Rudolf : Hosea, Kommentar z.A.T.XIII, 1. 1966. pp. 86—90

7) 例えば H. Wildberger : Jahwes Eigentumsvolk. 1960. pp. 110 以下。

めに与える”（イザ43：4），“イスラエルが幼なかつたとき、私（ヤハウェ）はこれを 'hb し、エジプトから我が子として召出した”（ホセ11：1）のように 'hb と選びの思想との結合が暗示されている箇所のあることを指摘するにとどめる。この他マラキ1：2でエサウ（＝エドム）を sn' してヤコブ（＝イスラエル）を 'hb したといわれるのは、前者を斥けて後者を選んだことである。イザ41：8も 'oohabii を大部分の注解者のように“わが友”とではなく、Westermann<sup>8)</sup>らと共に“私の愛する（アブラハム）”と解するならば、“私が選んだヤコブ”と対句をなすことになる。こうして、神が民を 'hb するという場面で選びとの関連が直接には出てこない箇所はホセ3：1 14：5 エレ31：3だけとなる。

### 3. 2. 'hb の意義素

以上の考察から次のように仮定する：《相手を望ましいものと認め、これと精神的にも肉体的にも結合することを強く欲する》。

このような定義は、'hb が本来人間関係とくに男女間の場面に現れる動詞で、神と人との場面に出るのは類推に基く二次的用法である可能性が大きいからである。事実、‘世俗的’用例はヤハウィストにすでに見られるのに対し、‘神学的’用例はホセアに始まるといってよい。ヤハウェが自分のみに専心仕えさせるためにイスラエルの民を追求してこれを選んだという思想が、'hb と bhr とを結合したのである。また男女が合体を遂げ、あるいは神が人をすでに選んだといわれた後にもなお 'hb がいわれるのは、いつまでも相手を自己に属するものとして、その関係を持続したいからである。

このように 'hb は本来激しい性的意欲であって、日本語の「恋する」に見られるような漠たる憧憬の情ではない。'hb が単なる心の状態だけで終るものでないことは、普通“知る”と訳される jd' が創4：1 38：26 王上1：4のように性的結合をも意味し得ることと関連しよう。この二つの動詞は文法面でも‘未完了形’より‘完了形’をとることが圧倒的に多いという特徴を共有するが、そのこととも関連して語義的意義特徴にも共通のものがあり、上に見たような 'hb に伴う肉の結合に限り、jd' で

8) C. Westermann: Das Buch Jesaja. Kap. 40—66. (ATD 19) 1966. 当該箇所。

表現されることがない<sup>9)</sup>のは、そのためであろう。すなわち、これらの場合 'hb の意味場面の中にすでに jd' という事態が含まれている、と考えられるのである。

#### 4. sn' 4. 1 'hb との意義関係

分布表が示すように、'hb と sn' は男女間という語義的環境に現れることが他の語よりも多く、しかもその際、しばしば対立的に用いられる。例えばヤコブはラケルを 'hb したのに対して、レアは sn' されたものとして扱われ(創29:30, 33), 申21:15—17の二人の妻は h'hwbh 《愛されている女》と hsnw'h 《憎まれている女》として対立させられる。神の人に対する場面でも同様で、例えばマラキ1:2, 3(上掲)。同一の人物を対象とする場合でも、'hb か sn' かの何れかであってその中間はないかのような表現がとられる。例えば、サムソンの妻はサムソンに「あなたは私を sn' するだけで、'hb しない」といい(士14:16), アムノン は義妹タマルを辱しめたのち“タマルを大いに sn' するに至り、タマルを 'hb した 'hbh よりもタマルを sn' した sn'h の方が大きかった”(サム下13:15)とされ、ヨセフの兄たちは父がどの兄弟よりもヨセフを 'hb しているのを見て、彼を sn' する(創37:4)。

それではこのような用例から、'hb と sn' とは、反義的 (antonymous)<sup>10)</sup> であるよりむしろ相補的 (complementary)<sup>10)</sup> である、というべきであろうか。相補的意義関係をもつ二語の間には  $x \square \sim y$ ,  $\sim y \square x$  の関係が成立たねばならない。<sup>10)</sup> しかし上に見たように「sn' していて 'hb していない」という表現はある(士14:16, さらにホセ9:15)が、「'hb しないで sn' する」ということが同一の主体についていわれる例は見出せない。さらに両語がもし相補概念を表わすならば、×「神が悪を 'hb しない」とか×「女神を sn' すべからず」のような表現も可能な筈である。故に 'hb と sn' とは相補的意義関係は有せず、普通いわれるように<sup>11)</sup>

9) サム 上 1:19 のエルカナとハンナの場合が唯一の例外かと見えるが、この箇所 の jd' はハンナの懐妊の前提として記されているのである。

10) '反義的' '相補的' のような意義関係の術語については J. Lyons: Introduction to Theoretical Linguistics. Cambridge 1969. §10.4 を参照。例えば single と married, male と female はそれぞれ 'complementary' であり, big と small 等は 'antonymy' の関係にある、といわれる。

11) 例えば THAT, TWAT のそれぞれ 'hb の項参照。

反義語であるとするべきであろう。

#### 4. 2. sn' の場面

このように sn' が 'hb の反義語であり、かつ 'hb の意義素が上述のようであるならば、sn' の意味場面には「相手を遠ざける」という要素が現れることが予想される。まず男が女を sn' する場面を明示的に展開させた例は少ないが、僅かにサム下13：15以下のアムノンとタマルとの不祥事の描写において、“アムノンがタマルを大いに sn' し、…タマルに「さあ、出てゆけ」と言って”タマルを“追出した”ことが語られる（サム下13：15—18）。この追放（17. šlh…m'l, 18. jš', hi.）が sn' の場面で現れる箇所をあげると、“君たち（アビメレクラ）は私を sn' して君たちの所から追出した（šlh）”（創26：27）。“君たち（ギレアデの長老達）は私（エフタ）を sn' して私を父の家から追放した（grš）ではないか”（士11：7）。またホセアはギルガルにおけるイスラエルの悪事を回顧し、“げに彼処で私は彼らを sn' した、彼らの行為の悪の故に私はわが家から彼らを追放する（grš）”（9：15）とヤハウェをして言わしめる。これらの例から sn' という精神活動は相手を遠ざけるというよりも、力づくで追放する動機であり得ることが分る。この傾向はさらに、相手を殺す・滅ぼすという、より攻撃的な態度に発展する：異母弟ヨセフに対する父の偏愛を見て“ヨセフの兄たちはますます彼を sn' し”（創37：8）、これを殺す計画を案ずる（20）。詩人はヤハウェに向って“あなたは悪をなす者をすべて sn' し、偽りを語る者を滅ぼす”（詩5：6—7）と歌う。“君は教えを sn' し、わたしの言葉を斥けた”（詩50：17）では“斥ける”と対句をなす。アブサロムはアムノンがタマルを辱かしたことの故に、アムノンを sn' し（サム下13：22）、計画的に殺害する（23—29）。ヤハウェは“ヤコブの高ぶりを忌み嫌い、その高殿を sn' する。私は町とそれに満ちる者を（敵に）渡そう”（アモ6：8）と言う。さらに“この上なき憎しみを以て私は彼らを sn' し、彼らは私の敵となった”（詩139：22）を参照。'hb の分詞形 'ooheeb が《友》を意味するのに対し、soonee' は《敵》を表わす。以上から次のように仮定する。

#### 4. 3. sn' の意義素

《相手をしりぞけ、できれば消滅させることを強く欲する》。

以上に挙げた以外の多くの文例においてこの意義素は充分妥当である。二三説明すると、“自分の咎を惜しむ者は息子を sn' する者”（箴13:24）は「息子を叱らず甘やかしている父親は、息子の死を願っているに等しい」ということを意味し、“盗人と共に煩つ者は自分自身を sn' する者”（箴29:24）の後半の意味は「わが身に破滅をもたらす」ということになる。

## 5. rsh と hpš

この両語は共に《gern haben》とか《Gefallen haben an》などと訳され、また対句を形成することもある（マラ1:10 詩51:18 147:10）‘類義語’である。しかし両語の意義の相異は以下に見るように、その意味場面から明らかに観取される。

### 5. 1. rsh の場面

(1)  $N_2$  が  $N_1$  の為にあることを行なうと、 $N_1$  が  $N_2$  を rsh する。例：“わが聖なる山でイスラエルの全家は挙って私に仕えるであろう。そこで私は彼らを rsh し、そこで私は君達の献げ物と…を求めらるであろう”（エゼ20:40）。祭壇における献げ物の仕方が規定されたのち“そうすれば私は君達を rsh する”（エゼ43:27）。“彼が神に祈ると神は彼を rsh する”（ヨブ33:26）。アラウナがダビデに“あなたの神ヤハウェがあなたを rsh されますように”と言ったのは、ダビデがヤハウェの祭壇を築くために来たから（サム下24:18—23）。“ヤハウェは彼を恐れる者、その恵みを望む者を rsh する”（詩147:11）。

(2)  $N_1$  が  $N_2$  の  $N_3$  を rsh する。この場合、 $N_3$  は  $N_2$  の行為や献物等であるから、結局意味構造は(1)と同じである。例：“ヤハウェよ、彼の力を祝福し、彼の手の業を rsh し給え”（申33:11）。“山に上って、木を伐り出し、神殿を建てよ。そうすれば私はそれを rsh し…”（ハガ1:8）。“私の唇の捧げる讚美を、ヤハウェよ、rsh し給え”（詩119:108）。

### 5. 2. hpš の場面

$N_2$  にとって望ましいことを  $N_1$  がすることによって、 $N_1$  は  $N_2$  を hpš する。例：シェバの女王がソロモン王にいう、“あなたの神ヤハウェが祝福されますように。彼はあなたを hpš して、あなたをイスラエルの王座につかせた…”（王上10:9；代下9:8）。“私の敵が私に打ち勝てないことによって、あなたが私を hpš することを私は知る”（詩41:12）。

“もしヤハウェが我々に  $h\dot{s}$  するならば、彼は我々をこの地に連れ行き、それを我々に賜うであろう…”(民14：8)。“彼が私を  $h\dot{s}$  したので、私を救われるのだ”(サム下22：20 詩18：20)。“(ヤハウェが) 彼を  $h\dot{s}$  しているから、彼を救うであろう”(詩22：9)。“ヤハウェが君を  $h\dot{s}$  して、君の地は夫を得る…”(イザ62：4)。“もし(ヤハウェが)「私はお前を  $h\dot{s}$  しない」と言われるなら、どうか彼が善しと見給うように私になし給うように”(サム下15：26)。

### 5. 3. $r\dot{s}h$ と $h\dot{s}$ の比較考察

上の場面が示すように、 $r\dot{s}h$  は主体にとって好ましい行為を客体がなすことを前提とするのに対し、 $h\dot{s}$  は客体にとって願わしい行為を主体が行なうことを予想する。 $r\dot{s}h$  は客体から差出された行為に対する主体の受動的態度であり、 $r\dot{s}h$  すること自体が客体への報酬であって、主体の側のそれ以上の行為は関与的でない。この、 $r\dot{s}h$  が受動的姿勢だということは、上の例文も示すように意味場面に捧げ物が現れることや、この動詞が“聞く”(エレ14：12)、あるいは“嗅ぐ・見る・聞く”(アモ5：21—3)のような‘感覚動詞’と平行に現れ得ることからもうかがえる。‘世俗的’場面でも創33：10のように贈物との関連は明らかである。 $r\dot{s}h$  が受動的であるといっても、客体の行為に応じた姿勢ということであって、強い意志は含んでいるのである。それ故“この民についてヤハウェは言う「このように彼らはよるめきたがり、足を大事にしなかった」。だからヤハウェは彼らを  $r\dot{s}h$  しない”(エレ14：10)のように否定もしばしばなされるのである。これに反して  $h\dot{s}$  は客体の側の行為を問題とせず、主体の一方的態度である。このことは (kl)  $'\dot{s}r h\dot{s}$  《(何でも)  $h\dot{s}$  したこと》という表現は頻出する(サム下20：11 王上9：1 イザ55：11 56：4 ヨナ1：14 詩115：3 135：6 箴21：1 伝8：3、否定文はイザ65：12 66：4)のに、(kl)  $'\dot{s}r r\dot{s}h$  という表現は皆無であることにも反映している。客体の側からすれば、何であれ相手が  $h\dot{s}$  したことであれば、それは同時に自分にとって善い結果を伴うのであるから、こういうことが言えるのである。反対に命令形が  $r\dot{s}h$  の2例(詩40：14<sup>12)</sup> 119：108)に対して、

12) 詩40：14では“ヤハウェよ私を救うことを  $r\dot{s}h$  し給え”となっていて、 $h\dot{s}$  と全く同じ用法が現れている。これはまた  $l+inf.$  を伴う  $r\dot{s}h$  の唯一の例であり、この点でも  $h\dot{s}$  と同じである。 $h\dot{s}$   $l+inf.$  は申25：7, 8 士13：23 サム上2：25 王上9：1 エレ42：22 詩40：9 ヨブ9：3 ルツ3：13 に現れる。

hps にないことも、おそらく両動詞のこのような意義の差と関連するであろう。

それでは hps の動機は何かといえ、'hb におけると同じく、客体の存在自体に対する価値判断であると思われる。つまりわれわれは、rsh の動機が客体の行為であるのに対し、hps のそれは客体の存在だ、と見たいのである。かかる見解は、さらにこれらの動詞の客体となる人間・神以外のものの語義的特徴を比較することによっても、確かめられよう。すなわち、rsh にのみ限られる客体としては、“人の手の業”（申33：11），“人の仕事”（伝9：7），“人の道”（箴16：7 23：26）等があり、これに対して hps にのみ限られる客体は“恵み、おきて、義”等（ホセ6：6 エレ9：23 詩35：26, 27 112：1 119：35），“ヤハウエの言葉”（エレ6：10），“悪人がその道から立帰ること”（エゼ18：23 33：11），“神に近いこと”（イザ58：2），“神の道を知ること”（イザ58：2 ヨブ21：14），“祝福”（詩109：17），“栄誉を与えること”（エス6：6等）などがある。つまり前者は、価値については本来 neutral な行為であり、後者は主体にとってプラスの価値を有する事柄である。

次に両動詞の意義の共通点としては、主体を客体よりも身分の高いものとして把握している点であり、従って神を客体とする例は見出せない。

#### 5. 4. hps と 'hb の比較

分布が示すように、'hb と違って hps は神を客体とすることもなく、女の男に対する動作となることもない。これは前節の最後でも触れた点であって、言い換れば、「身分の上下」という意義特徴が hps では関与的であるけれども 'hb では非関与的である。<sup>13)</sup> この条件の許す範囲内では両動詞はパラレルに現れることがある。例えば、創34：3でシケムはディナを 'hb しているが、19では hps。ヨナタンのダビデに対する態度はサム上19：1では hps であるのに、20：17では 'hb となっている。

しかし両者の相異はこれだけではない。統語論の面を見ると、hps は人を客体として取る場合は必ず b- 前置詞句を目的語とするのに対し、'hb

13) Gerlemann (THAT, I. hps の項) は hps の profan な意味を 'die Zuneigung eines Menschen zum anderen; bes. die Gunst eines rechtlich oder gesellschaftlich Höhergestellten zu einem von ihm irgendwie Abhängigen' と説明している。

は ('t- を伴った) 名詞句と直接に統合する。例えば創 34:19の ḥps bbt-j'qb を3の wj'hb 't-hn'r と比較せよ。このような文法的特徴の相異は意味場面における次のような相異に反映している、と思われる。すなわち 'hb の場面に現れた「相手との結合」や「選び」という要素が ḥps の場面には全く出てこないということである。これは次のことを含蓄している。'hb は対象に激しく直接働きかけてこれを自分のものにしようとする意欲であったのに対し、ḥps はむしろ客体とある距離をおき、そのものの存在に自分の喜びを見出す態度である。

5. 5. rḥ の意義素《気に入ったものとして受け入れてやる》

5. 6. ḥps の意義素《その存在を喜ぶ》

## 6. rḥm (pi.), ḥnn, ḥml

この三動詞は何れも多くの用例で“憐れむ”と訳される。語義的環境は、神を主体とすることが多い点が三者に共通であり、「物」をも客体とすることがある点で ḥml は rḥm, ḥnn と異なる。この後の二つは対句をなすことも多い(出33:19 王下13:23 イザ27:11 30:18)が、その活用形の分布は次の表が示すように、かなり対照的である。

	単1	単2	単3	複3	命令	その他
rḥm(pi.)	16	2	13	4	0	8
ḥnn	2	2	14	1	24	11

この表から明らかなのは、(1) 単数1人称は rḥm に圧倒的に多い。ḥnn の2例は出33:19で rḥm の対句として出てくるもので、文体的配慮の加わった特例として見ることができる。(2) 命令形は rḥm には皆無なのに、ḥnn に24例もあること。

### 6. 1. rḥm の場面

(1) 神がイスラエルの民を再び選ぶこと：“ヤハウエがヤコブを rḥm して、イスラエルを再び選び、彼らとその土地で休らわせ給う時…”(イザ14:1)。“私は彼らを追放したのち、再び彼らを rḥm し、めいめいをその嗣業の地に帰す”(エレ12:15)。“ヤハウエが怒りを止め、君に rḥmj m を与え、君を rḥm して君の先祖に誓ったように君を増す”(申13:18)。“見よ私は再びヤコブの幕屋を起し、その住いを rḥm する。

町はもとの丘の上に建てられ、塔はかつての場所に立つ…”(エレ30:18)。“ほんの暫らく私は君を捨てたが、大きな *rḥmjm* を以て君を集める。怒りを発して暫らく君から顔を隠したが、永遠の恵みを以て君を *rḥm* する…私の恵みは君から移らず、私の平安の契約は動かない、と君を *rḥm* するヤハウェはいう”(イザ 54:7—10)。“異邦の子らは君の城壁を築き、その王たちは君に仕える、げに私は怒って君をこらしたが、恵みを以て君を *rḥm* する”(イザ60:10)。“私はユダの家を強くし、ヨセフの家を助けよう。私は彼らを連れ戻し、まことに彼らを *rḥm* する”(ゼカ10:6)。以上は、ヤハウェがイスラエル民族の先祖に約束した土地に再び彼らを帰還させ、昔の繁栄を回復させる、という場面である。*rḥm* のこのような関連は次の場面で一層明白である。

(2) “運命を転換する”<sup>14)</sup> (*hšjb 't-šbwt* 又は *šb 't-šbwt*): “君がヤハウェに立帰ってその声を聞くとき、君の神ヤハウェは君の運命を転換し、君を *rḥm* し、…”(申30:2, 3)。“私は彼らの運命を転換し、彼らを *rḥm* するからである”(エレ33:26)。“私はヤコブの運命を転換し、イスラエルの全家を *rḥm* し、私の聖なる名に対して熱中する”(エゼ39:25)。

このような“運命を転換する”との結合は他の精神活動動詞には見られないのである。

(3) “私は *rḥm* されざる者を *rḥm* し、わが民ならぬ者に向って「汝はわが民」という”(ホセ2:25) では *rḥm* と「わが民とすること」とが対句になっている。

(4) ‘世俗的’場面では、7例中3例が親の子に対する態度を表わす：“(メデア人の)弓は幼児らをうち倒し、胎の実を *rḥm* せず、その眼は子供らを惜しみ見ない”(イザ13:18)。“女が自分の乳呑み子を忘れ、自分の胎の子を *rḥm* ことを忘れるだろうか”(イザ49:15)。<sup>15)</sup> “父が子

14) イスラエル民族にとって‘運命の転換’が何を意味したかは、この表現が祖国帰還の約束と結びついて出てくる エレ 30:3 31:23—25 32:44 33:6—9 ヨエ 4:1—3 アモ9:14—15 を参照。なお‘運命を転換する’という解釈を我々は E.L.Dietrich (*šûb šebût. Die endzeitliche Wiederherstellung bei den Propheten. BZAW 40. Giessen 1925*) に負う。さらに W.L.Holladay: *The Root šûbh in the Old Testament. Leiden 1958. pp.110—114* 参照。

15) マソラ・テキストのまま、すなわち *mrḥm* を *min+raḥem* と読んだ場合。

供らを r<sub>hm</sub> ように、ヤハウェは自分を恐れる者を r<sub>hm</sub>”（詩103：13）。

## 6. 2. ḥnn の場面

(1) N<sub>1</sub> が N<sub>2</sub> を ḥnn すれば、N<sub>2</sub> にとって願わしいことが起る：  
“神様があなたのしもべに ḥnn した子供たち”（創33：5）は神が自分を  
ḥnn したから子供が授かったということ。さらに創33：11参照。ダビデ  
は“ヤハウェが私を ḥnn すれば子供は死なない”とあって断食した、と言  
う（サム下12：22）。“ヤハウェがあなたを ḥnn するように”（創43：29  
民6：25）は、その結果相手に善きことが起ることを希う祝福の言葉とな  
る。“（神は）彼を ḥnn して言う「彼を救い、滅びの穴に下ることを免  
れさせよ…」”（ヨブ33：24）。

(2) N<sub>1</sub> の気に入ることを N<sub>2</sub> がすれば、N<sub>1</sub> は N<sub>2</sub> を ḥnn する：  
上掲のサム下12：22の場面で、ダビデはヤハウェに ḥnn されることを願  
いつつ断食して嘆いたのであり、“悪を憎み、善を愛し門では公義を立て  
よ、おそらくは万軍の神ヤハウェ、ヨセフの残りを ḥnn し給うであろう”  
（アモ5：15）とか、“さあ我等を ḥnn して下さるように神の顔を宥め  
よ”（マラ1：9）とさえ言われる。

(3) とくに詩篇に頻出する命令形 ḥnnj “私を ḥnn し給え”は、上  
の(1)、(2)に対応して次のように分類される。

(I) (a) 具体的な救いの出来事を求める：“ヤハウェよ、ḥnnj、私を医  
し給え”（41：5）。“ḥnnj、私を助け起し給え”（41：11）。“ḥnnj、  
汝の豊かな憐れみにより、わが咎を拭い去り給え”（51：3）。“私を顧  
み、ḥnnj、汝の僕に力を与え、汝の婢の子を救い給え”（86：16）。“私を  
顧み、ḥnnj、汝の約束に従ってわが歩みを確かになし給え”（119：132）。

(b) 苦難の状況を訴えて、神が自分を苦しみから救い出すことを期待  
する：“汝の怒りを以て私を責めず、ḥnnj、私は弱り衰えている”（6：  
2、3）。“ḥnnj、私は悩み苦しむ、わが目は憂いにより衰う…”（31：  
10）。“ḥnnj、人々が私を踏みつけ、仇する者らがひねもす私を虐げてい  
る…”（56：2）。“ḥnnj、我らに侮りが満ち溢れている…”（123：3）。  
“私を顧み、ḥnnj、私は独りわびしく苦しむ”（25：16）。

(II) 自分の行為を披瀝して神の ḥnn を求める：“私は誠実に歩む、  
私を贖い ḥnnj”（26：11）。“ḥnnj、わが魂は汝に寄り頼む”（57：2）。

“私は心を尽して汝の恵みを乞い求める、汝の約束に従って ḥnnj,” (119 : 58)。「自分の叫びを聞いて ḥnnj」というのもこの部類に入ろう：“私が呼ばわる時、答え給え…ḥnnj, 祈を聞き給え”(詩4 : 2)。“私は喜びの声をあげ、犠えを捧げ、歌ってヤハウェを讚美するであろう、私が声を上げ呼ばわる時聞いて、ḥnnj, 私に答え給え”(27 : 6, 7)等。

### 6. 3. rḥm と ḥnn の比較考察

rḥm の‘神学的’用例において、rḥm がイスラエルの運命の転換につながることを見たのであるが、その際 rḥm することの外的動機は明示されていず、この場合の rḥm はすべて1人称の形をとっていて、主体の一方的態度であることが暗示される。この点は前章で見た ḥps と同じであって、ḥnn のように命令形をとることがないことも、ḥps と、同様の理由から、共通である。しかしながら、ḥps ではその動機を客体の存在価値に求めることができたのに対し、rḥm では“契約は動かぬ”(上掲イザ54 : 10)という言葉も示すように、主体が約束に忠実であろうとすること—あるいはむしろ主体の責任感—が、その動機である。このことは、‘世俗的’場面で rḥm が親の子に対する態度を表わしていたことと関連しよう。何故なら、親は子を自分の子と認めて rḥm するのだから。そもそも‘運命の転換’は客体の側の条件に基いてなされるものでもなければ、いわんや客体から要請されて図られるものでもない。客体にとっては思いがけなく起るものなのである。

これに反して、ḥnn は客体の側から把握した主体の態度であり、客体から主体に向って希求され得る行為である。<sup>16)</sup> 命令形が頻出し、一人称が皆無といえるのはこのためである。詩篇において ḥnnj が“顧み給え”“答え給え”“聞き給え”“みそなわせよ”のような命令形と並んで出てくるとも、この観点から説明されよう。

次に 5. 1. (1) の rḥs の場面と 6. 2. (2) の ḥnn の場面とを比較すると、両者は客体から差出された行為に対する態度という点で共通である

16) H.J.Stoebe (Die Bedeutung des Wortes ḥāsād im Alten Testament. VT, II, 1952, pp.244—254) は次のように言う「ḥn という語根は……ただ施す者の自由な好意においてだけ決定されるのではなくて、それを受ける者も必ず一緒に問題にされねばならない恩恵表示を意味する……それに反して raḥmim は……それを施す主体においてのみ決定される」(pp. 245—6)。

ことが分る。しかし既に見たように rsh はそれ自身が客体の行為に対する報酬であるのに対し、hnn は具体的な報酬をもたらす（客体の側から理解した）動機にすぎない。

#### 6. 4. rhm の意義素

《自分の子として認知し、大事にしようと思う》。

このように仮定し得るのは、上述のように rhm が神学的には「再び選り、運命を転換する」ということと関連していること、世俗的には（父）親<sup>17)</sup>の子に対する態度だからである。“私はもはやイスラエルの家を rhm しない”（ホセ1：6）とか“彼女（自分の妻）の子らを私は rhm しない”（ホセ2：6）ということは、自分の民と認めない、自分の子として認知しない、ということである。さらにエレ6：23 50：42で rhm の否定が 'kzrj “残忍”と対句になっていることを参照。

#### 6. 5. hnn の意義素 《願いを叶えてやりたいと思う》

#### 6. 6. hml の場面

(1) hml しないで殺す：“私は hml せず…彼らを滅し尽す”（エレ13：14）。“彼は彼らを剣の刃にかけて殺す、私は…hml しない…”（エレ21：7）。“彼の後からこの町を通り過ぎ、打ち殺せ、…君たちは hml するな”（エゼ9：5）。“hml することなく諸国民を殺す”（ハバ1：17）。その他、哀2：21 3：43 代下36：17参照。“私はもはやこの地に住む者を hml しない…見よ、私は人をそれぞれ友の手中に渡し、またその王の手中に渡そう”（ゼカ11：6）。“彼の射手は私を囲み、彼は私の腎を引裂いて hml しない”（ヨブ16：13）。“彼の上に襲いかかって hml しない”（ヨブ27：22）。“ヤハウェはヤコブのすべての住家を滅して hml しない”（哀2：2）。哀2：17参照。“その者のいうことを聞くな、情をかけるな、hml するな、かばうな。そうではなくて必ずその者を殺せ。<sup>18)</sup>君が第一に手を下して殺せ…”（申13：9、10）。“さあ行っ

17) Stoebe は上掲論文 (p. 246) で、イザ49：15（注15参照）を例外としつつ、rhm という動詞は女性から言われることがないとして、これを父親の新生児認知の際の慣習と結び付けている。

18) マソラ・テキストのまま。多くの注解者は此処を七十人訳に従って「必ず彼のことを告知しなければならぬ」と読替える。

てアマレクを打ち、それに属するすべてのものを滅し尽せ。それを hml するな。男も女も…殺さねばならない”（サム上15：3）。“人は互いに hml せず、右につかみかかってなお飢え、左に喰いかかってなお飽かず…”（イザ9：18）。“（バベルの）若者達を hml せず、その全軍を滅し尽せ”（エレ51：3）。“その羊を買う者がこれを殺しても罪にならず…。その牧者らはこれを hml しない”（ゼカ11：5）。

(2) hml して、殺さない：サウルの子七人を渡すことをギベオン人から要求されたダビデが“サウルの子ヨナタンの子メリバルを hml した。それはダビデとサウルの子ヨナタンとの間に結ばれたヤハウェの誓いの故である”（サム下21：7）。サウルとその軍勢はヤハウェの命令（上掲サム上15：3参照）に反し，“アガグと羊、牛の良きもの、肥えた獣…を hml し、これらを献げ尽さなかつた”（サム上15：9）。

(3) hml と qn' のパラレル：“ヤハウェはその国に対して熱心になり (qn')、その民を hml した”（ヨエ2：18）。qn' については別途に論じたいが、《失なった物、自分にはないものを追求する》という意義素が立てられるようである。なお、“私はイスラエルの家が囚われて行った諸国民の間で汚したわが聖なる名を hml した”（エゼ36：21）を“私はヤコブの運命を転換し、イスラエルの全家を rhm し、わが聖なる名に対して qn' する”（39：25）と比較せよ。

(4) hml せず、こわれ、無くなるにまかせておく：“その砕け方は陶器師のかめが碎かれるようで、打碎かれて hml しない”（イザ30：14）。“バベルに向って矢を放て、矢に対して hml するな”（エレ50：14）。否定をとれば、“たとえ悪はその口に甘く、彼はそれを舌のかけに隠し、それを捨てず、hml して、その口の下に保っていても…”（ヨブ20：13）。

### 6. 7. hml の意義素

《殺したり、失ったりしたくないと思う》。

このように仮定できる理由は、以上の場面からほぼ明らかで、説明を要しないであろう。「殺す」ということが明示されない場面でも、例えばパロの娘が河で拾った嬰兒を hml したのは、見過しにすれば死んでしまうと思ったからである（出2：6）。

略 号

THAT: Theologisches Handwörterbuch zum Alten Testament. (Herausgegeben von E. Jenni unter Mitarbeit von C. Westermann). Band I. München 1971.

TWAT: Theologisches Wörterbuch zum Alten Testament. Band I. Lieferung 1—5. (bkhまで), Stuttgart 1970以降.

[1972.11.14]